

福田一志さんとの思い出

田 中 聡 一

福田一志さんの訃報を聞いたのは、壱岐市教育委員会文化財課から壱岐市立一支国博物館建設のために長崎県文化スポーツ振興部文化施設整備室へ出向中の松見裕二さんからの電話連絡でした。それはあまりにも急で、いつも冗談ばかり言っていた福田さんでしたので最初は信じる事ができなかったのですが、それは悲しい知らせとなってしまいました。

福田さんとの出会いは、私が平成14年春に勝本町教育委員会の嘱託として勤務しはじめた時で、福田さんもほぼ同じ頃に長崎県原の辻遺跡調査事務所へ赴任して来られていました。現在は壱岐市として郷ノ浦町・勝本町・芦辺町・石田町の4町が合併していますが、当時はまだ合併以前の壱岐郡時代で、壱岐に住み始めた当初原付バイクの免許しか持っていなかった私にとって勝本町から芦辺町と石田町の町境にあった原の辻遺跡調査事務所までは非常に遠く、旧4町と原の辻遺跡調査事務所の文化財担当者によって四半期ごと、年4回行われていた壱岐郡文化財担当者会議とその後の懇親会で福田さんと顔を合わせる程度でした。しかし、たまに文献を探しに原の辻遺跡調査事務所へ行くと後ろから「なんばしよっとね？」と声をかけてこられ、よく冗談を言っておられました。合併後に郷ノ浦町の長崎県の官舎近くへ引っ越してからは仕事以外でも食事や飲み会の席をご一緒する機会が増え、公私ともに大変お世話になりました。

ある日、夕方近くになって、臨時の収入があったので食事を奢ってくださるという電話があり、確か原の辻遺跡調査事務所の中尾篤志さんと一緒に海の近くのホテルの1階にあるレストランでステーキをご馳走になりました。福田さんは少し高めのステーキを注文されたのですが、値段が高かったのに私たちのステーキ肉よりも小さめで、それが悔しかったのかももう一枚私たちと同じステーキを注文する様な、そんな子供っぽい一面もある福田さんでした。

平成18年春に福田さんが学芸文化課本課へ異動してからも、泊りがけの出張で長崎へ行った時には良く一緒に飲みに行きました。仕事でも普段の生活でもいつも自然体で、自由な印象を受ける福田さんには壱岐での現場生活が合っていたのでしょうか、今になって思えば長崎市の本課へ異動となってしばらく経ってからの福田さんはいつも少し疲れ気味だったような気がします。福田さんが亡くなる4か月ほど前だったと記憶しています。夜遅い時間帯にかなり酔われた福田さんからいつもの調子で「なんばしよっとね？今から飲みに来んね？」という電話があり、「次に長崎へ行った時にはご一緒します。」と約束したのが福田さんとの最後の会話となってしまいました。色々と話されたいことがあったのかも知れませんが、今となっては悔やまれます。福田さん、先に行って待っていてください、また一緒に飲みましょう。